

第2回 食品廃棄対策委員会

平成25年3月27日(水) 15:00～
JAビルカンファレンス401会議室



第2回委員会を開催し、議題「検討課題の絞り込みと取り組み(案)について」ご議論いただきました。

第1回委員会でのご意見と委員へのアンケートおよびヒアリングを実施した結果、検討課題が「消費者への周知・啓発」「期限表示の在り方」「食品廃棄物の活用」「取引に関する課題」の4つに集約されました。議論の結果、上記の4つの検討課題の中から、委員会趣旨である、生活者視点での課題ということに重点を置き、まずは「消費者への周知・啓発」について検討を進めることといたしました。また、具体的な周知・啓発方法を策定するため、消費者および家庭へのアンケート調査、モニター調査を実施し、「食に関する意識」と「食品廃棄に関する実態」を把握してまいります。

今後は具体的調査内容について十分に精査し、調査分析を実施、食品廃棄削減へ効果的な周知・啓発活動を行うとともに、新たな課題等についても柔軟に取り組むを進めてまいります。



第2回委員会でのご意見(一部紹介)

- ・アンケートを実施することに関しては、清水会長が常々仰っている、生団連は消費者・生活者の視点を大事にして取り組みを行う団体という意味で、消費者・生活者のニーズを捉えて取り組みを進めることは、生団連の趣旨に沿った取り組みになっていくと思う。
- ・アンケート調査について、家族構成がこの20年で大きく変わっている。ざっくり将来を見通すと一人世帯、二人世帯、三人世帯が同じ程度の割合になるので、調査の対象をしっかりと捉える必要がある。
- ・最大の目的は500～800万トンあるとされる食品ロスを減らすということなので、それぞれの主体(小売・メーカー・消費者等)に分けてアンケートを取り、それぞれの改善すべき項目へ取り組みをすることが重要であると思う。
- ・中長期的な考えだが、50代、60代の方は「もったいない」ということの教育を受けていた。例えば、ご飯粒一粒残すとお百姓さんに怒られるといったこと。今の時代は飽食で物を捨てても、すぐに別の物を食べられる。「もったいない」ということを小中学生から食育として教育し、意識を持たせることで、大人になったときに多少なりとも効果があるのではないか。
- ・まず、「食べられるか、食べられないか」以前に、「食べたいか、食べたくないか」といった意識の問題があると思う。
- ・食品への鮮度意識に関して、製造年月日表示がない加工食品が多いために、五感での判断が鈍っているのではないか。比較的年配者は、長年の経験で大丈夫かどうか分かるが、若い人には、いつ製造されたかの情報がないがために、判断力が弱っているのではないかという考え方もある。